



大洲城二の丸奥御殿跡

- 1 調査箇所 大洲城二の丸奥御殿 (第3次調査)
- 2 調査期間 平成27年3月10日～ (継続中)
- 3 調査面積 約37.3㎡ (計5調査区)
- 4 調査主体 大洲市教育委員会
- 5 調査の目的と成果概要

大洲城の奥御殿に関する絵図は複数残されており、なかでも元禄5(1692)年『御城中御屋形並地割図』(元禄絵図)や、江戸期『御城中屋敷指図』(指図)などは、御殿の構造と役割とを解明するうえで、非常に重要な資料です。しかしながら、考古学的な調査事例がほとんどなく、実際にどのような建造物があったのかなど、その実態については不明な点が多く残されていました。そのため今回の調査は、江戸期の奥御殿に関する遺構の有無や、残存状況の確認を目的として実施しました。

調査範囲の多くは明治期以降の開発によって削平が進んでいましたが、第2、4、5調査区において、部分的に**奥御殿に伴うと思われる石敷遺構**を検出することができました。

また、第3調査区では、**南北方向にのびた石列**を検出することができました。この石列の性格は今のところ不明ですが、奥御殿に伴う可能性があるため、今後慎重に検討する必要があります。

さらに、第1調査区では、**大洲城内では初めてとなる^{かじ}鍛冶遺構**を検出することができました。鉄素材を熱するための複数の鍛冶炉や、炭置き場と思われる遺構を検出しています。これらの鍛冶遺構は、大洲城が近世城郭として整備されたころに遡る可能性があり(1600年前後)、近世大洲城が成立した時期を考えるうえで、非常に重要な発見といえます。



図1 大洲城奥御殿調査区配置図 (GoogleEarth 利用)



I. 大洲城の御殿とは？

近世城郭の多くは、城内に御殿をもちます。大洲城の御殿は大きく2種類あり、「表御殿」と「奥御殿」とに分けることができます。表御殿は、いわゆる「対面」の場であると同時に、大洲藩藩主である加藤氏が実際に執務をした空間です。現代的に換言すれば、県庁舎としての機能がありました。一方で今回の調査対象である奥御殿は、藩主やその家族の居住空間であり、私邸としての性格が強いものです。

元禄5（1692）年作図の『御城中御屋形並地割図』には、表御殿と奥御殿とが描かれており、少なくともこの時期には成立していたことがわかります。江戸期の大洲城は、大規模な火事や震災被害を幾度も経験しており、それに伴って御殿も再建などを繰り返したと考えられます。しかしながら、そのことを具体的に記した文献が残されておらず、その実態解明が大きな課題です。今回の調査では、奥御殿の実態の片鱗を見ることができました。引き続き調査を実施することで、大洲藩藩主であった加藤氏が、どのような生活を送っていたのかなどをさらに詳しく解明できる可能性が高まります。

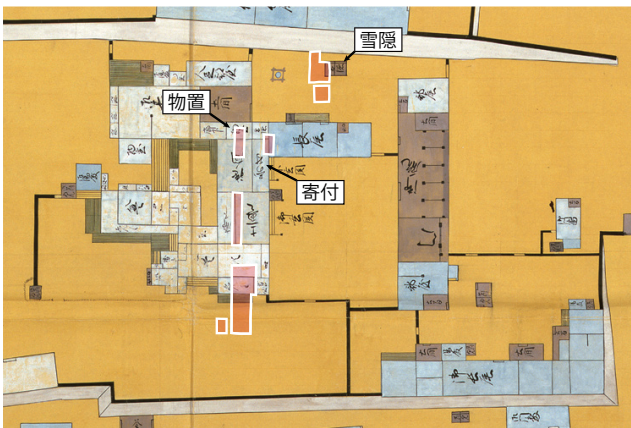


図2 『御城中御屋形並地割図』（元禄5年）と調査区略図（推定）

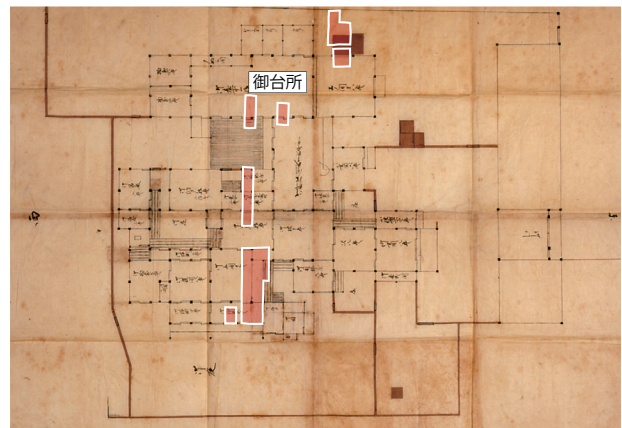


図3 『御城中屋敷指図』（江戸期）と調査区略図（推定）

II. 第2、4調査区での成果

○奥御殿に伴う可能性のある石敷の検出。

第2、4調査区では、東西方向にのびる石敷遺構を検出しました。他の遺構との切り合いや、近現代の住宅開発などによって乱れている箇所もありますが、少なくとも東西に5m以上敷設されています。

これら石敷は、元禄絵図（図2）によれば「物置」「寄付」など、指図（図3）によれば「御台所」などの上にあたると想定されます。しかし、奥御殿建物の直下に石敷が敷かれることは考えにくいので、必ずしも「物置」「寄付」「御台所」などにかかわる石敷だと断定することはできません。今後、調査成果と絵図との整合性を検証する必要があります。



図4 第2調査区石敷



図5 第4調査区石敷

Ⅲ. 第3調査区での成果

○南北方向にのびる石列遺構を検出。

石垣に直交するように、南北方向へ石列が並んでいることを確認しました。この石列の西側には、裏込^{うらごめ}と思われる円礫^{えんれき}が充填されており、石垣もしくは建造物などが存在したことを示唆しています。

元禄絵図（図2）や、指図（図3）と照らし合わせれば、この調査区付近には「雪隠（便所）」^{せっちん}などのような建物が存在したようです。さらに、江戸時代前期

に描かれたという『大洲御城地割図』には、南北方向の石垣と長屋とが描かれています。しかしながら、この遺構の性格を決定づけるだけの資料を発見できておらず、また、第2、4調査区と同様に、絵図との整合性にも課題が残ります。石列の東に面する深い土坑とあわせて、これまで残された絵図には描写されていない、奥御殿に関する未知の遺構の可能性もあり、今後慎重に調査、検討を加える必要があります。

Ⅳ. 第1、5調査区での成果

○鍛冶関連遺構の検出

第1調査区において、鍛冶炉跡^{かじろ}3基以上、鍛冶に伴った炭層などを検出しました。鍛冶炉跡は、いずれも上側が削平されており、下部構造が残存している状況でした。もっとも遺存状態の良い炉跡は、直径およそ40cmで、赤く焼けた炉壁痕が明瞭に確認できます。炉跡内からは椀型の鉄滓^{てっさい}（鍛冶の過程で不純物が溶けて固まったもの）が出土しています。さらに、この炉跡の東側には、鉄砧^{かひなこ}（鉄床）^{かひなこ}を固定したと思われる石が残されていました（図8）。

また、この炉跡のすぐ南にも別の炉が存在しており、複数時期（複数回）にわたって操業されていたことがわかります。また、調査区の南側では、同じ場所に何度も鍛冶炉を築き、操業したと思われる痕跡が残されていました（図9）。

土層の堆積順序から、この鍛冶炉は奥御殿が整備されるよりも古い時期に操業されていたことが判明しています。奥御殿が整備されるのは、天守や櫓、長屋など瓦葺建物、石垣などが整備され、大洲城が近世城



図6 石列遺構



図7 炭置き場と考えられる炭層

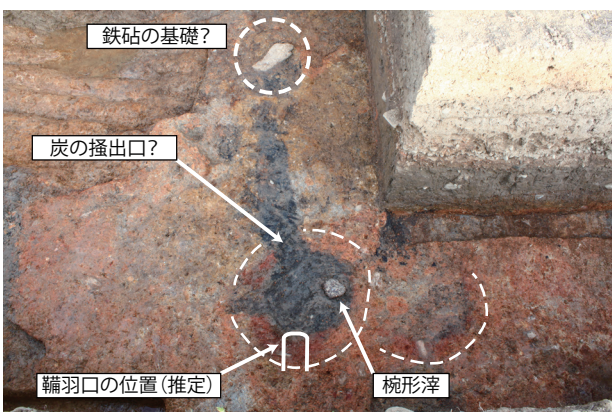


図8 第1調査区中央の鍛冶炉跡



図9 第1調査区南側の鍛冶炉跡



郭としての姿が整えられて以後のことです。しかし、今のところ鍛冶関連遺構の層から瓦が出土していないことを考慮すると、近世城郭としての整備が完了する前の段階に操業されたと考えられます。また、鍛冶炉内に残されていた木炭の放射性炭素年代を測定したところ（AMS測定）、1522～1643年という数値が示されました。これは、大洲城が整備される時期に重なる結果です。

多数の鍛冶炉を同じ面で発見したことから、短期間に集中して操業されていた可能性があります。ただし、今回の調査では、これら鍛冶炉でつくり出されたとされると思われる鉄製品は、残念ながらほとんど出土していません。これは、製品の多くが城内の建造物建築のために持ち出された結果だと考えられます。

○シルトの堆積

上述の鍛冶炉の上に、間層（整地層）を挟んで、シルトが広く堆積していることを確認しました。シルト（silt）とは、粘土より粗く、砂より細かい^{さいせつぶつ}碎屑物のことを指します。堆積の範囲は、第1調査区から第5調査区にまで及んでおり、この^{くるわ}曲輪（中の丸）の南半部がシルトに覆われていたこととなります。



図10 第1調査区におけるシルトの堆積

このシルトの堆積状況を観察することで、この層が^{きゃくど}客土（人為的に盛られた土）ではなく、「水」が作用して自然堆積した層である可能性が強いことが判明しました。この層も、下に位置する鍛冶炉跡と同様、奥御殿が整備される以前に形成されたものです。鍛冶がおこなわれた後に一度整地され、その後にシルトが自然堆積したこととなります。今のところ、この層の性格は不明ですが、奥御殿が整備されるまでの変遷を追ううえで、重要な発見と位置付けることができます。

V. 鍛冶遺構とは？

鉄製品をつくるには、原料・燃料の調達、製鉄…など、数多くの工程が必要です。今回の調査で検出した鍛冶遺構とは、鉄素材（主に軟鉄や鋼）を加熱して叩き、様々な鉄製品をつくり出す工程（鍛造）の痕跡です。

鍛造をおこなうには、鉄素材を半熔融の状態にする必要があります。そのために「炉」と、^{ふいご}「鞴」という送風設備とを設け、高温を発生させなければなりません。楕円形に地面を掘りくぼめた炉に木炭を置き①、そのなかに鉄素材を置きます。このとき、鞴による送風で火勢を強め②、鉄素材を半熔融の状態にします。半熔融になった鉄素材を取り出し、^{かなとこ}鉄砧（鉄床）の上に置いて^{かなとこ}錠で鍛打しながら形を整え③、必要な製品をつくり出します。

今回の調査で検出した鍛冶遺構では、大洲城内の建造物で使う、^{くぎ}釘や^{かすがい}錠といった比較的小さな鉄製品を製作していたのではないかと想定しています。

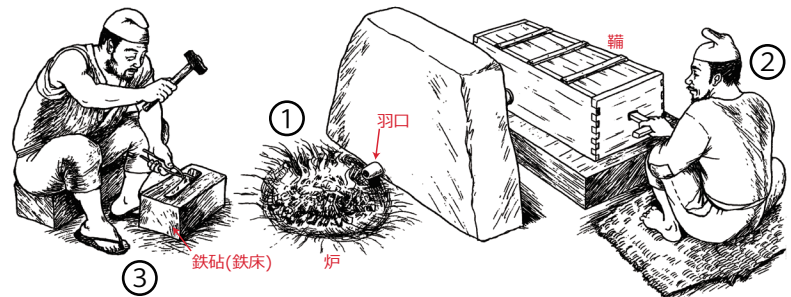


図11 鍛冶の模式図〔潮見1988を一部改変〕

本調査において、以下の方々に、ご指導、ご協力いただきました。記して感謝申し上げます。（順不同、敬称略）

下條信行（愛媛大学名誉教授）、村上恭通（愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター長）、八木弘明（愛媛大学考古学研究室）、持永荘志朗（同）、國友美那（同）

【主要参考文献】

大洲市立博物館編 2004『大大洲城 よみがえる大洲城』市制施行50周年記念事業 企画展図録、大洲市立博物館
 潮見 浩 1988『図解 技術の考古学』、有斐閣
 鈴木瑞穂 2008『イラストでみる はるか昔の鉄を追って～「鉄の歴史」探偵団がゆく』、電気書院